

イギリス・アメリカ相互交流に関する ディスコース研究

高 橋 正 平

イギリス・アメリカ相互交流はイギリスの北米アメリカ植民から始まる。その植民が本格化したのがヴァージニア植民である。1606年12月、時の王ジェームズ一世から特許状を得たロンドン・ヴァージニア会社が三隻の船をヴァージニアへ送った。イギリスによるヴァージニア植民の歴史はここから始まった。ヴァージニア植民は飢餓と原住民との対立に苦しめられ、植民は期待通りの成果をあげることができなかった。そこでヴァージニア会社は当時の著名な説教家に「この世の楽園」ヴァージニアへの植民を投機者及び入植希望者に訴え、彼らの植民熱を冷まさせないために説教を行ってもらった。現在で言えば一種のアジ演説の感がないわけではなかったが、ヴァージニア会社は説教家を積極的に利用した。高橋（正）の論文はこれら説教家のうち3人を取り上げ、彼らの説教のレトリックを論じた。ヴァージニア植民は本来は利益を求めての植民であった。後年 John Winthrop はヴァージニア植民が失敗したのは植民の目的が物質的であって宗教的ではなかったからだと言ったが、各説教家はその経済性の強い植民を宗教的使命を担った植民とした。そのために説教家が利用したレトリックは聖書の一節をヴァージニア植民に「適応」というものであった。ヴァージニア植民擁護の最初の説教である William Symonds は、Abraham の故郷からのカナンへの旅立ちをヴァージニア植民者に適応した。Abraham が主の命に従い、故郷を離れカナンに向かったように、ヴァージニア植民者も故郷イギリスを離れ、異郷の地ヴァージニアへ向かう。そして Abraham が以後イスラエル人の祖となったようにヴァージニアへ向かうイギリス人もヴァージニアでアメリカの祖となり、永久にその名を歴史に止めると檄を飛ばした。次の

William Crashaw も John Donne も同じく聖書を盾にヴァージニア植民を擁護した。彼らの説教はいうなれば聖書で行われたことをヴァージニア植民者は「今」再現していることを強調し、植民の前途に立ちはだかる不安を払拭することを意図していた。聖書を武器にヴァージニア植民を擁護するゆえ、当然のことながら植民の合法性も自然と解消される。高橋（正）の論文は初期ヴァージニア植民擁護の説教を扱い、説教の巧みな「適応」というレトリックの解明を試みた。

高橋（康）の論文はヴァージニア植民よりも少し時代が下ったマサチューセッツ植民の政治と宗教の問題を扱っている。マサチューセッツ植民はヴァージニア植民よりも宗教的性格の強い植民であったことは植民者が敬虔なピューリタンであったことから容易に理解できる。高橋（康）の小論はアメリカ植民時代から懸案問題であった信教の自由と政教分離について植民地時代の John Cotton, John Winthrop, そして現代の Paul G. Kauper の3人から概観している。マサチューセッツ植民はそのモデルをカルヴィンに求めていたことはよく知られている。カルヴィンは教会と国家を区別したが、信仰は国家の精神的支柱であり、国家は信仰を擁護すべきだと説き、ジュネーブでは徹底した神政政治を行った。カルヴィンの思想には二面性があり、教会と国家の区別からは信教の自由が生まれてくるが、国家は信仰を擁護すべきだという主張からは政教一致が生まれてくる。これがマサチューセッツでも見られ、Roger Williams は政教分離の立場をとり、それに対し John Cotton は民主主義を排し、神政政治を主張した。Cotton はイギリス、ダービー生まれでケンブリッジ大学卒業後英国国教会に理想の宗教の姿を見い出せず、1633年、マサチューセッツに移住したピューリタンである。Cotton は、ピューリタンがその行動、規範すべてを依拠した聖書に教会が忠実であれば神権政治は民主政治よりいいとする一方、教会と国家との「癒着」を最も懸念した。一見神政政治の強硬な推進者である印象を与える Cotton は実は教会権力であれば国家権力であれば権力は抑制されなければならないとの考えを持ち、政教分離をも提唱していたのである。マサチューセッツ湾植民地初代総督 John Winthrop もイギリス、サフォーク州の生まれで、ケンブリッジ大学在学中にピューリタンの影響を受け、宗教的弾圧から逃れる

ために1630年にアメリカに渡った。Winthrop は神権政治の弱点を十分意識しており、ピューリタンの神権政治に対して批判的な態度を取っていることを忘れてはならない。ピューリタンというと厳格な妥協を許さない人というイメージを受ける。しかし、宗教と政治という問題になると、厳しい神権政治を導入しつつあったなかでも、中には教会と国家、聖と俗の権力はバランスを保って維持されるべきだと主張するピューリタンもあり、それが現在のアメリカの政教分離の基礎となっているのである。

荦沢の論文は17世紀ニューイングランドのピューリタンを扱い、特に Cotton Mather の *Magnalia Christi Americana* (1702) を取り上げる。Mather はニューイングランドの神政政治の代表的人物で、*Magnalia* は宗教を中心としたニューイングランドの歴史書である。Mather の祖父 Richard は1635年にイギリスから移住し、Mather 自身 Mather 家 3 代目のピューリタンである。Mather は、宗教心が薄れていくニューイングランドでいかにして植民地建設当初の敬虔なピューリタニズム精神を復興させるかに奔走し、*Magnalia* を書いたのである。荦澤は、本書で伝記に費やされているページ数が圧倒的に多いことに注目しているが、それは「先人たちの人生を学ぶ」ことがいかに重要であることを示している。Mather は、いわばピューリタニズムの「黄金時代」復活を願って本書を書いたのである。植民当初の偉人に倣い、もう一度ニューイングランドに敬虔なピューリタニズムの復活を願ったのである。そしてその願いはまた、ニューイングランドにおけるピューリタンの共同体の復活の切望でもあると荦澤は結論付ける。宗教という当時の人々の共通認識を用い、共同体崩壊の危機を防ごうとしたのである。

イギリスとアメリカの交流はイギリス人によるアメリカ植民から始まるが、ヴァージニア植民とマサチューセッツ植民とでは植民の目的そのものが異なっている。一方は経済性を追求した植民で、他方は純粋なピューリタンによる「神の国」建設が目的であった。ヴァージニア植民にも「福音」を広めるという目標はあったが、入植者に敬虔な宗教人は少なかった。マサチューセッツ植民はそれに反し、故国イギリスでの宗教的弾圧を逃れて来たピューリタンが主流であったために植民は宗教とは切っても切れない関係にあった。彼らは故国イ

ギリスで実現できなかったことを新天地アメリカでの実現に努めた。それは John Cotton や John Winthrop や Cotton Mather（彼は直接イギリスからの移住者ではなかったが）に如実に表れている。彼らの生涯はいかにして敬虔なピュータニズムをアメリカに根付かせ、ピューリタン王国を築き上げるかに捧げられたと言っても過言ではない。今回のプロジェクトでは主として植民初期のイギリスとアメリカの関係を扱ったが、両者の関係が文学作品にどのように表れているかを論ずるのが次の課題となる。